

延命治療の中止など終末期医療の在り方が議論され、痛みの緩和を重視する「がん対策基本法」も施行された二〇〇七年。団塊世代の退職が進む〇八年は、さらに多くの人が人生の最終楽章について思いをめぐらすだろう。幸せな最期と、それを支える介護や医療とは何か。諏訪中央病院(長野県茅野市)の鎌田實名誉院長と社会学者の上野千鶴子・東大大学院教授が意見を交わした。

さよならのプリズム

< 4 >

命に寄り添って
 多くの患者さんを見支えてくれた友人たちに
 与られた鎌田さんや、家残ったお金をどう分ける
 族に頼らない老後についても決めた。きちっとや
 て書かれた上
 野さんの本が
 読まれていま

幸せな最期とは—

鎌田實氏と上野千鶴子氏対談(上)



うえの・ちづこ 1948年富山県生まれ。京大大学院社会学博士課程修了。京都精華大助教授などを経て95年から東大大学院教授。ジェンダー研究の第一人者として知られ、近年は介護問題にかかわる。著書は「おひとりのさまの老後」など。

待するのは、一人でも安
 心して老いて死んでいけ
 るサポートです。
 上野さんは末期がん
 のお父さまをみとられた
 一スターみたくに変わ
 った。

鎌田 立派でなくていいんだよね、七転八倒しても。

本人の意思大切に 鎌田氏

上野氏 信頼できる関係を

鎌田 一人だって死んでいけるよ。いろんな形がある。誼訪中央病院で三年前に亡くなった六十一歳の乳がんの女性は、事情があって家族と縁を切っていた。何度も話し合っていた。葬儀を決め、墓を買い、葬儀に来てくれる人へのお別れの文も自分で書いた。



かまた・みのる 1948年東京生まれ。東京医科歯科大卒。長野県茅野市の諏訪中央病院で「やさしくあたたかい医療」を実践し、88年院長に。現在は名誉院長。イラクなどへの医療支援も。著書に「がんばらない」「幸せさがし」など。

鎌田 一人だって死んでいけるよ。いろんな形がある。誼訪中央病院で三年前に亡くなった六十一歳の乳がんの女性は、事情があって家族と縁を切っていた。何度も話し合っていた。葬儀を決め、墓を買い、葬儀に来てくれる人へのお別れの文も自分で書いた。

からだ

「お医者さんは周りから配慮され慣れていて、人に配慮するという生活習慣がそもそもない」と指摘する知人もいます。

上野 どちらも本音です。尊厳死の議論があるけど、日付入りの意思なんて信じるな、日に日に変わるんだから。父が見てそう思った。元気がなくなった時に覚悟して書いた意思は変わる。人間に首尾一貫性があることが立派だとは思わない。鎌田 それでも、元気な時に、思いを書いたり語っておくことは大事だと思う。医療現場は、それに少しでも沿いたい、本人の意思に準じてやって行くという方向にならなければならない。上野 司法は介入する通らぬと思うが、そうならないのは患者側に医療不信が強すぎるから。信頼できる友人がいる場合もあるし、日頃の言動を知ってればどうすればいいか分かる。わたしを酌んだり患者の話を聞ける友人がいないのか。鎌田 いっぱい理由はあります。忙しいとか、「聞く」という教育をしていなかったとか。

上野 医者の家庭で育ったから、激務がよく知っています。時間給に換算するのこともいい仕事じゃない。でも、サービスマンという自覚を持っている医者は少ない。「お医者さんは周りから配慮され慣れていて、人に配慮するという生活習慣がそもそもない」と指摘する知人もいます。